参列しました。

○機関誌『偕行』への投稿

『偕行』7・8月号～11・12月号には69会会員から投稿された次の記事が掲載されています。

・振武台陸上防衛懇話会について（7・8月号）・柳澤壽昭

・関東大震災における陸軍の災害救護（9・10月号）・今野茂雄

・インパール作戦の焦点（11・12月号）・中垣秀夫

・俳句・川柳（各号）・鮫島洋二郎

○同期生訃報

最後にたいへん残念なお知らせです。

第45期生会会長の持田修様は8月頃からパーキンソン病に罹患し、通院・入院して療養されていましたが、10月17日に御逝去されました。本誌面をお借りし、深く哀悼の意を表するとともにご冥福をお祈り申し上げます。

つどい

旧弘前偕行社で青森県総会

青森偕行会長　稲村　孝司　陸自75

青森県偕行会は、秋分の日を迎えた9月23日、旧弘前偕行社小会議室において令和5年度の総会を開催した。総会は9月第4土曜日開催を慣例としているところ、秋分の日と重なり、更に東北方面隊の記念日行事とも重なり参加者には負担となった。

今年は重大な審議事項を二つ抱えた。

一つは、「偕行社と陸修会の合同について」、二つめは、「旧弘前偕行社を弘前市に譲渡することについて」である。

総会は、国歌斉唱の直後、野村市議会議員の9月8日の弘前市議会一般質問の結果報告が行われた。会員でもある同市議は、東北方面隊記念日行事参列のため、冒頭約15分間での報告となった。同議員の質問は、8月18日に旧弘前偕行社を所有・管理する学校法人弘前厚生学院が、来年度から学生募集を停止し、同年度末での閉校が地元新聞に報道されたことによるものであった。質問は先ず、「旧弘前偕行社の設置経緯、旧弘前藩主別邸を由緒としている『遑止園』を擁した場所に、オリジナルな形で建物が遺っている、全国でも唯一の施設である」と述べ、「弘前市として旧弘前偕行社の今後についてどのようにお考えか?」と質した。市側は櫻田市長自らが、野村市議以上に詳しく旧弘前偕行社の設置経緯、ルネサンス様式を基調とした大規模な木造平屋建てで、レトロモダンな風合いが美しい外観であるほか、内部についても、将校サロンに相応しい応接所、玉突き場、客室など華やかなしつらえが特徴であると述べ、敷地は、弘前藩第9代藩主津軽寧親（やすちか）公が整備した別邸「富田御屋敷」のあった場所で、現在は皇太子時代の大正天皇が宿泊した際に「遑止園」と名付けた庭園があり、建物と周辺環境が一体で遺る全国でも他にはない旧陸軍の施設である。と述べ、陸軍関係施設の代表的遺構であり、貴重であるとして、平成13年6月に国の重要文化財に指定され、平成25年から7年間に亘る保存修理と、活用のための整備工事を行い、明治40年の竣工当初の姿に復原されたなどと述べ、「当市は、江戸時代の城郭建築・寺社建築から、明治・大正時代の洋風建築、さらには昭和のモダニズム建築まで多彩で豊富な建造物が現存している文化都市であり、旧弘前偕行社については、軍都そして学都として繁栄した東北を代表するハイカラな街・弘前の象徴として、ひときわ価値の高い建物であると認識している。市としては、所有者とともに、文化庁等の関係機関と協議しながら、その価値を守るための方策を検討する」と答えたとのこと。

野村議員は、更に追加質問を三つした。答弁は担当の教育委員会教育部長が行った。三つめの質問では、財団法人偕行社の紹介と、同社からの多大な寄付と会員多数の寄付があったことから、「市長の

政治的決断が必要になってくるのではないか。市として旧弘前偕行社を取得すべきではないか」と、再度市長の答弁を求めた。それに対し、市長は「旧弘前偕行社の価値を守っていきたい。それを前提として関係機関と協議したい」との答弁を引き出したとの報告があった。

その市長答弁は、翌日の地元新聞に大きく報道され、市民、関係機関特に市役所関係部署に大きな影響を与えた。野村市議会議員の選挙活動に携わり約12年となる中、この時ほど政治の力、市議会議員の有難味を感じた事はなかった。偕行会一同只々感謝の念で一杯だった。

陸奥新報
9月9日 土曜日
弘前偕行社
市、保全活用を検討
関係機関と協議へ
東奥日報

二つめの「偕行社と陸修会の合同について」は、『偕行』令和5年9・10月号別冊「陸上自衛隊幹部退官者の会（陸自RO会）」設立趣意書、設立趣意書の補足説明、陸修会の設立に当たって（理事長談話）を基に説明した。会員からは、現役幹部自衛官の修親会との関係について質問があり、陸軍偕行社は現役将校の会であり、陸軍将校のOB会は必要がなかったこと、米軍のような退役軍人会があれば陸上自衛隊のOB会も必要がないことが話し合われた。更に、陸修会の行う「部隊毎に関する協力・支援」活動については、偕行会が先行して青森、弘前及び八戸の支部設立を準備する必要性が、隊友会との切り分けについては、隊友会の県の会長、支部長4人が偕行会の会員でもあることから、どの様な、どの様に活動を行うか検討することが話し合われた。

その他の審議事項は、昨年の事業報告、特に、『偕行』9・10月号により「忠霊塔を守る会発足に尽力」したこと、『偕行』11・12月号掲載予定記事により「忠霊塔周辺清掃奉仕」などを紹介した。

最後に、厚生学院大森事務局長から、学院閉校の経緯、弘前市との旧弘前偕行社譲渡の交渉状況等の説明があった。

懇親会は12名の出席となった。

旧弘前偕行社小会議室での記念撮影

懇親会は会長乾杯の発声で始まった。

春の花見に引き続き、5カ月振りの交流の輪を広げた。4時間に及んだ総会、懇親会の最後には、全員で会場内で写真を撮った。来春の花見での再会を期して旧弘前偕行社を後にした。

北海道偕行会全道大会

事務局　細島　邦夫　陸自73

北海道偕行会（代表世話人　木村清順陸自65）は4年ぶりの第78道大会を、ご来賓に北部方面総監部幕僚副長岡部健陸将補、講師にジャーナリスト井上和彦氏をお招きして、11月11日「ネストホテル札幌駅前」で開催した。

前段行事の講演会には札幌・真駒内・南恵庭の各駐屯地から現職幹部自衛官17名の出席を得た。各修親会長及び部隊長のご理解・ご協力の賜物である。

井上先生の講演は「北の守りを永遠に！　命を捧げた先人の感動秘話」を演題に、2時間近い熱弁を拝聴した。その一部を紹介したい。

講師　井上和彦氏

大東亜戦争は「アジアに対する侵略戦争」ではなく、「自存自衛のアジア解放戦争」だというのが正しい史観であり、マッカーサーも昭和26年、米国上院でそのように証言している。政治面・軍事面を問わず、誤った「定説」があまりにも多い。

日本軍は南方の島嶼戦でも米軍を苦しめたが、日本降伏の2日後、ソ軍は北千島の占守島に侵攻した。樋口方面軍司令官の自衛反撃命令を受けた現地軍は、復員・帰郷の望みを捨てて善戦し、ソ軍に甚大な損害を与え、停戦・講和に至った（彼我とも兵力約1万、ソ軍の死傷約5千、日本軍約6百）。この勝利によって、北海道北半を占領するソ連の野望はくじかれた。日本軍兵士の至純の愛国心・忠誠心を顕彰することは決して「戦争の賛美」ではない。誤った「定説」を再検証し、大東亜戦争を再評価することが必要である。

（注記）本講演の内容は、井上先生の近著『歪められた真実―昭和の大戦・大東亜戦争―』に詳細が述べられているので是非ご一読されたい。

なお、出席した現職幹部自衛官からは、「今まで聞いたことがない内容が多く、大変勉強になった」、「自衛官としてこれからも勉学を続け、正しい歴史を後輩に伝えていかなければならないと強く思っ